

長野県立歴史館たより

2020年 春号 vol. 102

特 集

春季展

2020年

「長野県の考古学」
—いのちをつなぐ技と交流—



令和2年度の歴史館の統一テーマは食です

長野県立歴史館長 笹本正治

本年度の展示には1年間の共通テーマを設けます。私たちにとって最も大きな課題のひとつが「食」です。日本では人口減少が大きな問題ですが、世界では人口が増えており、約75億9千万人の人が地球上に暮らしています。食物をいかに得ていくかは人類の大きな課題です。

3月14日(土)から6月14日(日)までは「長野県の考古学」が開かれます。今回の展示では縄文時代の後・晩期を取り上げ、気候変動の中で人びとが食料を得るためにいかに技を磨き、他地域と交流したかを中心にすえます。

7月11日(土)から8月23日(日)までは「地酒王国信州」の展示を行います。長野県には80もの蔵元があり、その数は新潟県の89に次いで日本2位です。県内各地を歩きますと、地元の人が推奨する地酒があります。地元の人の根強い人気に支えられ、地域住民と共にあるお酒が多いのが信州の特徴だといえるでしょう。

1952(昭和27)年には信州の酒造家と県酒類卸協同組合が協力して東京に進出し、「金紋信州」という共同銘柄を出しました。信州が一つになってお酒を売りに出したわけです。しかしながら、長野県の統一銘柄「金紋信州」は現在ありません。そして現在でもこれほど多くの蔵元があり、多様なお酒が造られていることが信州の地域文化の独自性を示します。お酒から信州の地域的特質、文化の多様性が見えてくることを狙った展示です。

9月15日(火)から11月29日(日)までは「稲作とクニの誕生ー信州と北部九州ー」の展示を行います。北部九州と信濃を比較しながら信州の特性を稲作の展開などを通してクニの成り立ちに迫ります。長野市榎田遺跡と松原遺跡は福岡県今山遺跡と並ぶ石斧の生産と流通の拠点でした。大量の

石の道具が弥生時代の大開発を支えたのでしょう。稲作の展開の中でクニが成立していきました。そして、北九州においては「奴国」や「伊都国」などの外国から認められた国ができあがりました。しかし、信濃にそのような国はできませんでした。両地域の遺物の比較の中から信州の弥生時代の特性を浮き上がらせたいと思います。

なお、展示期間中の9月15日(火)から9月27日(日)まで、福岡市博物館が所蔵する国宝の金印の実物を展示する予定です。

1月9日(土)から2月21日(日)までは中村不折(1866～1943年)の展示を行います。不折は近代日本の洋画家、書家として知られ、皆様が目にしたことがある清酒「真澄」や「神州一味噌」のラベル文字も書いています。

不折は江戸の京橋に生まれ、1870年に、一家をあげて母の郷里の長野県高遠に帰りました。19歳で西高遠学校授業生(代用教員)となり、22歳で飯田小学校の教師を勤めました。文字を巡る彼のコレクションは世界的に重要なものです。伊那谷から世界へと羽ばたいた不折の視点や活動を通して、私たちも現在を考えたいと思います。



中村不折が揮毫した清酒のラベル

(左:『画家・書家 中村不折のすべて』台東区書道博物館より転載)
(右:宮坂醸造株式会社 提供)

企画展を終えて

「戦国小笠原三代」新たなる展開

開館25周年記念秋季企画展「戦国小笠原三代」を無事終えることができました。ありがとうございました。ご覧頂いた方はいかがでしたか。また感想を寄せていただければありがたいです。

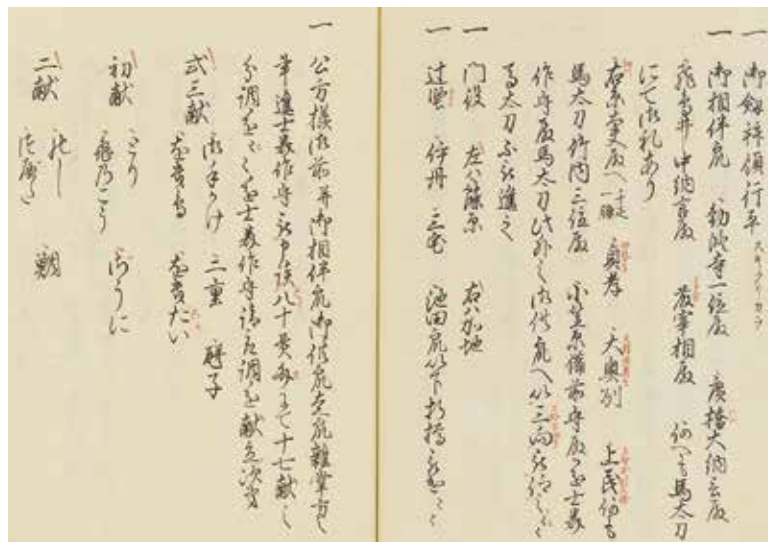
信濃国守護となった小笠原氏の企画展は県内では初めてでした。今回は、小笠原氏がもっている人的なネットワーク（つながり）に着目しました。このネットワークは多岐にわたっていますが都と信濃とのつなが

りに着目すると新しい視点が見えてきます。1つの例をあげます。

1561（永禄4）年閏3月、小田原城包囲のあと上杉謙信（長尾景虎）が関東管領に就任します。同じころ京都ではある出来事が起こります。

まず前月末の3月30日、將軍足利義輝が京都の三好長慶・義興邸に異例の御成をしました。御成の場では將軍と家臣が「共同飲食」することで主従関係の強化がはかられました。義興は將軍から相伴衆に任じられたので、三好家ではその返礼の意味もありました。主従間で贈り、贈られるという「互酬」は封建社会の重要な要素です。「式三献」という最も儀礼的な酒宴では主客銘々にそれぞれ3膳出されその都度献盃しあいます。そのあと本膳料理でもてなされます。献盃も繰り返され、通常本膳は7膳ですが、派手な場合はさらに増え、三好長慶は17膳も出したと記されます。酒や料理を留めなく飲食し続け、途中休息や芸能鑑賞を入れ翌日まで延々と続く宴。最後に同族小笠原植盛など奉公衆に礼物が進上されました。

この時、小笠原長時は武田信玄（晴信）により信濃国を追われており、小笠原氏の出身という三



新たに収蔵された「三好邸江御成記」（当館蔵）

好家に滞在していた最中です。式三献に出席したかどうかはわかりませんが、この作法は小笠原流故実の一つです。直後の閏3月4日、義輝の御内書が謙信へ発せられます。長時を信濃へ帰国させるよう尽力せよというのです。何というタイミングでしょう。

長時の一族には越後国上杉氏のもとにいるものもあり、信濃追放後の長時自身、一定の関係を保ち続けていました。また同族の京都小笠原氏、つまり幕府奉公衆の植盛は、義輝の近習であり、いざというとき主家の長時のために御内書発給の取次をおこなうと伝えていいます。長時と三好氏、京都小笠原氏、そして上杉氏。それぞれの接点を考えると、この機に長時と通じる三好氏の手引きを経ながら、長時復歸工作が折衝され御内書が発給された可能性が高いでしょう。しかも同月には長時および貞慶が本山寺（高槻市）の別当に対し信濃帰国を祈願する祈祷も依頼しています。

將軍義輝からの御内書。謙信にとっては信濃出兵の格好のお墨付きです。最大の激戦と称される永禄4年の川中島合戦、かくして起こったとみているのですが、いかがでしょうか。（村石正行）

2020年「長野県の考古学」 —いのちをつなぐ技と交流—

いのちをつなぐ技と交流

縄文時代中期末頃、寒冷化などの影響で集落数が激減し、縄文文化の頂点ともいわれる中部高地の縄文中期の生活環境の様相が大きく変化していきます。弥生社会が到来するまでの最後の縄文時代—縄文後・晩期をおみせします。

縄文時代後・晩期（約4,500～2,500年前）、長野県域では生業活動の変動を語る水さらし場状遺構や石器、広域な情報網があったことを示す土器や装身具が発見されています。

今回の展示では、寒冷化などの影響が生じていた時代のなか、人びとが次の時代へのいのちをつなぐために食料獲得・加工の技術を向上させた姿、他地域との結びつきを深めていった交流の姿を考古資料から探ります。

技術革新で乗り越える 堅果類利用の工夫…水さらし場状遺構

中野市栗林遺跡では、集落よりも低地の部分にクリの木板を組み合わせた水さらし場状遺構がみつかりました。トチのアク抜き作業などの共同作業施設と考えられています。低地を利用する工



中野市栗林遺跡 水さらし場状遺構（当館蔵）
展示室で復元します

夫や、効率よく堅果類を加工し保存する技術は、広く東日本に共通します。自然界で獲得した食料資源の加工や保存方法に関する広域の情報網の存在を、垣間見ていただきたいと思います。

調理具、食器の多様化



安曇野市北村遺跡 縄文時代後期の土器（当館蔵）

縄文時代後期になると深鉢、浅鉢、壺、やかんのような注口土器など様々な形の土器が登場します。深鉢・浅鉢のなかにも、大きさや精製・粗製、文様などのちがいが見られます。これらは、調理用・盛り付け用など食料の加工段階で使い分けをしたと考える説があります。

機能性を重視した形には、食料資源の利用に対する“匠の技”の存在も感じられます。

装身具にみる交流の姿

縄文人自身の装身具にも、交流の姿がみえてきます。飯田市中村中平遺跡では土製の耳飾りが多量に出土しました（表紙写真）。さまざまな大きさや模様、材料の粘土が異なるものなどがあり、他地域で作られた耳飾りも混ざっていると考えられます。耳飾りがたくさん出土する遺跡は、約3,300～3,000年前ごろに関東・中部地方を中心

に点在します。さまざまなところから集まった人びとで行う共同祭祀や、広域な情報伝達網の存在が考えられています。

同じころ、姫川で産出するヒスイなどを使って玉類を製作していたのが大町市^{いつ}一津遺跡で発見された集落です。たたき石や砥石などの製作道具や、製作途中の玉類、途中で壊れてしまった破片が出土しています。完成品はほかの集落へも持ち出されていたと考えられます。縄文人の装身具には単に身を飾るという意味のほか、他地域との結びつきを深める道具という意味もあったのかもしれない。



大町市一津遺跡（大町市教育委員会蔵）

縄文時代の終焉、弥生時代へ

長野県域の最後の縄文土器は、小諸市^{こおり}氷遺跡が標式となる「氷式土器」です。この時期、東海地方や北陸地方などの土器とよく似た土器も確認でき、一津遺跡などで発見された土器にはモミ状圧痕が残る例もあります。縄文時代末期以後、稲作文化を受け入れる要素が感じられます。



小諸市氷遺跡 氷式土器（当館蔵）

装飾されるうつわ

昨年、長野県立歴史館巡回展「長野県の考古学—時代を映す匠の技—」で縄文造形美の視点から好評を博した、長野県宝「信州の特色ある縄文土器」（2018(平成30)年指定）の展示も継続します。本年は上伊那地域の地域色あふれる県宝をご覧くださいと思います。



長野県宝

「抽象絵画文有孔罎付土器」
宮田村中越2遺跡出土
(宮田村教育委員会蔵)

長野県宝

「唐草文深鉢形土器」
伊那市原遺跡出土
(伊那市教育委員会蔵)

さらに、辰野町^{さわじり}沢尻東原遺跡や中野市^{みなみおほら}南大原遺跡など、長野県埋蔵文化財センターが調査した最新成果を展示します。資源を利用する工夫や、他文化を受け入れながらいのちをつなぐ人びとの姿や願いを感じていただければ幸いです。

(杉木有紗)

木の文化の国に住むということ

—遺跡から出土した木製品の保存処理と活用について—

私たちの周りには、たくさんの木製品が溢れています。木造の家、お椀やお箸などの日用雑貨や農耕具、仏像や正倉院宝物にあるような芸術品に至るまで木材を使用してきました。私たちは木の文化の国に住んでいるといってもよいでしょう。

遺跡を調査すると、石斧に使われた刃の部分の石だけが出土することがあります。石は土中でも分解されないで残りますが、柄に使われた木製品の多くは土中で分解され跡形もありません。どのように装着され、使われていたかは民俗例などから想像するしかありませんでした。ところが福井県鳥浜貝塚^{とりはま}では縄文時代の木製の斧柄が、また大阪府亀井遺跡^{かめい}では弥生時代の木製の斧柄が出土し、伐採用斧の装着方法などがわかりました。その後、長野市榎田遺跡^{えのきだ}では古墳時代の斧柄が発見されました。木製の柄の発見により、時代や地域によって柄の形態や樹種がさまざまであることや、使用された当時の人びと^{なりわい}の生業などがわかってきました。

榎田遺跡で出土木製品の樹種を同定（特定）したところ、古墳時代中期の農具にはクスギ節^{せつ}を多く用いているなどの傾向がわかりました。人びとは昔から樹種の特性を把握した上で、用途に応じて木を使い分けてきたのです。

一方、千曲市屋代遺跡群出土木簡から読み取れた文字からは、集団で布を織り役所に納めるなど、飛鳥・奈良時代の人びとの多様な暮らしがわかってきました。これなども、木簡が良好な状態で出土されなければわからないことでした。

湿地や乾湿の変化が少ない地中では、木製品が比較的良い状態で発見されることがあります。それでも、強度を保つセルロースなどの多糖類^{たとうるい}が失われて脆弱なため、変形・破損しないよう細心の注意を払って取り上げ、保存処理する必要があります。木材の劣化の最大の要因は乾燥ですが、他にも日光（熱膨張・紫外線）や凍結、虫による食害、腐敗、たんばく質分解等の原因が考えられます。劣化・消滅をできるだけ遅らせる手段として、保存処理が必要になってきます。現在、歴史

館では発掘調査された木製品の状態によって2つの方法で保存処理を行っています。

P E G（ポリエチレングリコール）処理法：木製品の細胞内の水とP E Gという薬剤を、1年以上かけて徐々に高い濃度の水溶液に置き換え、最終的に水を全てP E Gと置き換えて補強する方法。

凍結真空乾燥法（フリーズドライ）：木製品に40%から50%の濃度のP E Gを浸み込ませたあと、-30℃以下で凍らせ、減圧状態にすることで水を水蒸気として一気に昇華させ、細胞壁を変形させないように水分を取り除く方法。

木材を固化させて、安定した状態にすることで取り扱いやすくなり、加工のようすを観察し、接合、復元、保存、保管や展示が可能になります。

長野市春山B遺跡^{はるやま}から発掘された井戸枳材は、整理作業時の実測中、丸木舟を再利用したものであることが判明し、P E Gで保存処理されました。

この発見は、関係者はもちろん、修復された丸木舟を展示で実際に見た多くの人びとに驚きを与えました。出土した木製品の、発掘調査後の取扱いと、継続的調査による成果でした。



丸木舟 長野市春山B遺跡（当館蔵）

木製品の調査には、文化財としての価値を損なわないように細心の注意を払い、X線や赤外線調査など可能な限りの科学的調査を駆使して、多くの事実・情報を収集することが重要です。そして、精査した結果を報告書や展示などを通して多くの皆様に資料として還元し、利活用してもらうことが博物館の役割の一つでもあり、同時に次の世代にもしっかりと引き継いでいかななくてはならない責任を担っているのです。

（小林伸子）

御真影奉護に斃れた校長 —奉安殿建設の契機に—

1921（大正10）年1月6日の夕刻、埴科郡南条村の南条尋常高等小学校より火災が発生しました。校長の中島仲重^{なかじゅう}は、天皇の御真影を取り出そうと炎上する校舎内に突入し焼死しました。県立歴史館が収蔵する行政文書中に、その詳細を書き記した埴科郡長から長野県知事宛に提出された同月15日付「南条尋常高等小学校々舎焼失ニ関スル取調報告書」があります。

それによれば、自宅で来客と会食中だった中島校長が、学校火災の騒ぎを耳にしたのが午後6時半頃。火災現場へ裸足のまま駆けつけました。

「校長ハ宿直室ノ奉安所ニアル 御真影ヲ奉移セントシ急遽本館南側ノ階段ヲ駆け上ガラントセク人々モハヤ危険ナレバ止ムベシト言ヒタルモ『何大丈夫』ト言ヒツゝ駆け込テ階上ノ奉安所ニ至リ

御真影ヲ奉持シテ立ち出デントセシモ此ノ時己ニ一面ノ火トナリシ脱出スルヲ得ズ御真影ヲ奉持セル儘焼死セリ」と記述されています。中島校長は、他の制止を振切り火中に飛び込んでいったのです。報告書には、御真影を奉持したまま焼死体となった校長が、発見された地点を示す略図が添

付されていました。また、「不^{とりあえ}取敢開キタル村会ニ於テ村葬ヲ営ムコトニ決定シ」とあります。

御真影奉護に斃れた中島校長は称賛され、殉職として当時の新聞紙面が報じ、社会的反響とともに全国から弔慰金が寄せられました。これを基金として、「中島仲重先生之碑」が一周忌に殉職地に建立されました。

それまで、下付された御真影の拝戴には、講堂の演壇上に聖体拝領台を増設したり特別室が設けられ、扉に施錠し奉護されてきました。しかし、中島校長が焼死したこの火災を教訓に、全国各地域の学校では御真影奉護用の施設として校舎から離れた構内に堅牢な奉安殿を新たに建設するようになったのです。

坂城町立南条小学校の校舎は耐震補強工事を経て、広々と整備された校庭の中でひとときわ目を引きます。「中島仲重先生之碑」は学校の全面改築のため、1977（昭和52）年2月に学舎より一段高い現位置に、「殉職地の標識」の碑の脇に移設されました。

明治時代中頃から全国一律に配布された教育勅

語謄本は、いずれの文言も「天壤無窮^{てんじょう}ノ皇運ヲ扶翼^{ふよく}スヘシ」に結び付きます。天下に比類なき皇国の繁栄に国民は尽くせと、天皇中心の家族国家観を思想教育のなかに位置付けていたのです。そのため、天皇の分身であり代理とされた御真影は、命に代えても奉護しなければなりません。その結果、この痛ましい出来事は起きました。戦前にそのような聖旨徹底下の思想教育があったことを、学舎を眼下にこの石碑が無言で語り続けているのです。

（伊藤友久）



中島仲重先生之碑

中島仲重画像（『教育功労者列伝』より転載）

INFORMATION

インフォメーション

■2020年 3月～6月の行事予定

3月

休館日
2・9
16・23
30

春季展

2020年
「長野県の考古学」
—いのちをつなぐ技と交流—

3/14(土)～6/14(日)



上田市大日ノ木遺跡 石鏃 (当館蔵)

■考古学講座①

4/25(土) 13:30～15:00

講 師：当館職員

講座・イベント

県立歴史館の信州学講座

第7回 3/7(土) 13:30～15:10
「地域の縄文文化遺産を活かす」
(寺内 隆夫)

親子映画会

3/20(祝・金)・21(土)・22(日)・24(火)
※いずれの日も13:30～15:00

ティーンズ古文書講座

3/25(水)～3/28(土)
※いずれの日も9:30～12:00

4月

休館日
6・13
20・27
30

■講演会

5/16(土) 13:30～15:00

テーマ：縄文晩期から弥生への
社会変化 (仮)

講 師：石川日出志 氏

(明治大学文学部教授
明治大学黒曜石研究センター所長)



中野市栗林遺跡
水ざらし場状遺構の復元 (当館蔵)

体験は
どなたでも
ご参加頂けます



歴史館でこどもの日

5/5(火・祝)
まが玉作り・プラ板制作 等

各講座等の日程概要

4/25(土) 考古学講座①
5/9(土) 県立歴史館の信州学講座①
5/23(土) 古文書講座 (上級①)
6/4(木) 館蔵文書を読む会
6/6(土) 古文書講座 (中級A①)
考古学セミナー
6/7(日) 古文書講座 (初級A①)
6/11(木) 古文書講座 (初級B①)
古文書講座 (中級B①)
6/13(土) 県立歴史館の信州学講座②
6/27(土) 古文書講座 (上級②)

6月

休館日
1・8
15・22
29

行事アルバム

*** いい育児の日 ***



11月17日(日)、歴史館で子育て応援イベント「いい育児の日」を行いました。館内にはお子さん連れのご家族の姿がたくさん見られました。エントランスでは「どきもドキ」(土器や土偶のレプリカに色を塗る体験)を実施し、思い思いの色で塗られた素敵な作品が出来上がりました。

*** 県立歴史館の信州学講座 ***



10月19日(土)の第3回は、「博物館で考える信州の温泉」と題して、千賀康孝氏(松本市立博物館学芸員)に講演していただきました。松本を中心とした温泉利用の歴史を紐解く内容に51名の参加があり、「日本文化としての温泉を大切にしたい」などの感想をいただきました。

*** 近世史セミナー ***



12月8日(日)、「近世の災害とその復興」をテーマに近世史セミナーを開催しました。北原糸子氏講演「日本震災史—今、何が問われているのか」、研究発表「学際的に考える洪水—成の満水について—」(青木隆幸氏)、「近世飯田町の火災復興と消防体制」(伊坪達郎氏)があり、約100名の受講生が災害について学びました。

表紙の写真の解説

飯田市中村中平遺跡出土 土製耳飾り (飯田市教育委員会蔵、当館撮影)

中村中平遺跡は、笠松山系からなる扇状地の末端に位置する遺跡です。平成4・5年に飯田市教育委員会が行った発掘調査で、縄文時代中期の集落跡のほか、縄文時代後期後半から晩期前半ころの住居跡、墓跡、祭祀の場などがみつかりました。右下は9号配石墓跡から出土した耳飾りで、模様などから他地域でつくられた耳飾りの可能性があります。(左上:直径5.8cm、中央:直径3.8cm、右下:直径3.4cm)

長野県立歴史館たより 春号 vol.102

2020(令和2)年2月14日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ: https://www.npmh.net/

印刷 奥山印刷工業株式会社